記憶を継ぐ小径 - 東京における平和記念建築の再考 -

早稲田大学 創造理工学研究科 建築学専攻 小林恵吾研究室
兵頭璃季

01 計画背景

都市における道空間の体験

駅から目的地への道、地下鉄の乗り換え、密集した住宅街の路地など、都市にはさまざまな建築空間を通り抜ける体験が日常にある。建築内を通り抜ける体験をもとに、私は設計課題において道が貫入した建築を設計し、学部論文においては道を用いた建築の時代変遷について研究した。道をもつ建築は人々に無意識の建築空間体験を与えると考える。

渋谷ストリームの貫通通路

地下鉄の乗り換え動線

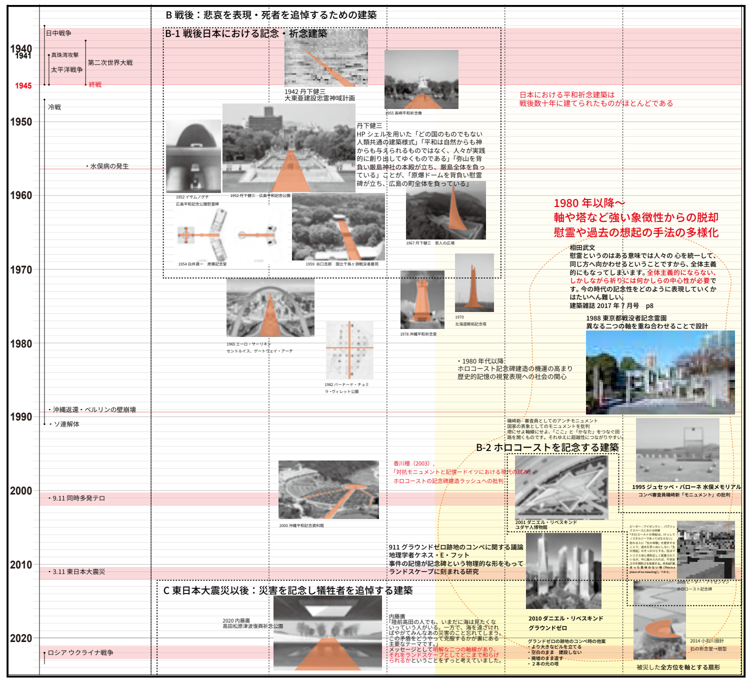
東京国際フォーラム

一方で都市部では再開発や建築物の建て替えにより土地の更新が激しく、その土地の歴史や記憶が受け継がれることは困難である。例えば震災や水害、戦災などの記憶はその土地に受け継がれるべきである。しかし実際は看板や石碑、資料館によって記録されており、それに気づいた人やその場所を見に行く目的がある人にしか触れられないのが現状である。

今回は道が貫入する建築のひとつの特性である「目的のない人も無意識に通り抜け、建築を体験する」ことを活かし、土地の記憶の継承のための施設を提案したい。

02 記念建築の調査

建築はいままで様々なものを記念し、後世へ人類の記憶を伝えようとしてきた。それらの「記念建築」の近代以降の主な歴史を年表にまとめ、変遷を捉えることで東京における記念建築を設計するための一助とした。


記念建築の変遷年表

近代以前、凱旋門など記念建築は勝利や大衆の鼓舞を目的とする建築が主だった。世界大戦以降は死者を追悼し、悲哀を表現する建築が主となる。また特に日本においては、丹下健三設計の広島平和記念公園など、一つの強い軸に永続性や象徴性を見出し、記念建築の形態操作をすることが主流となった。

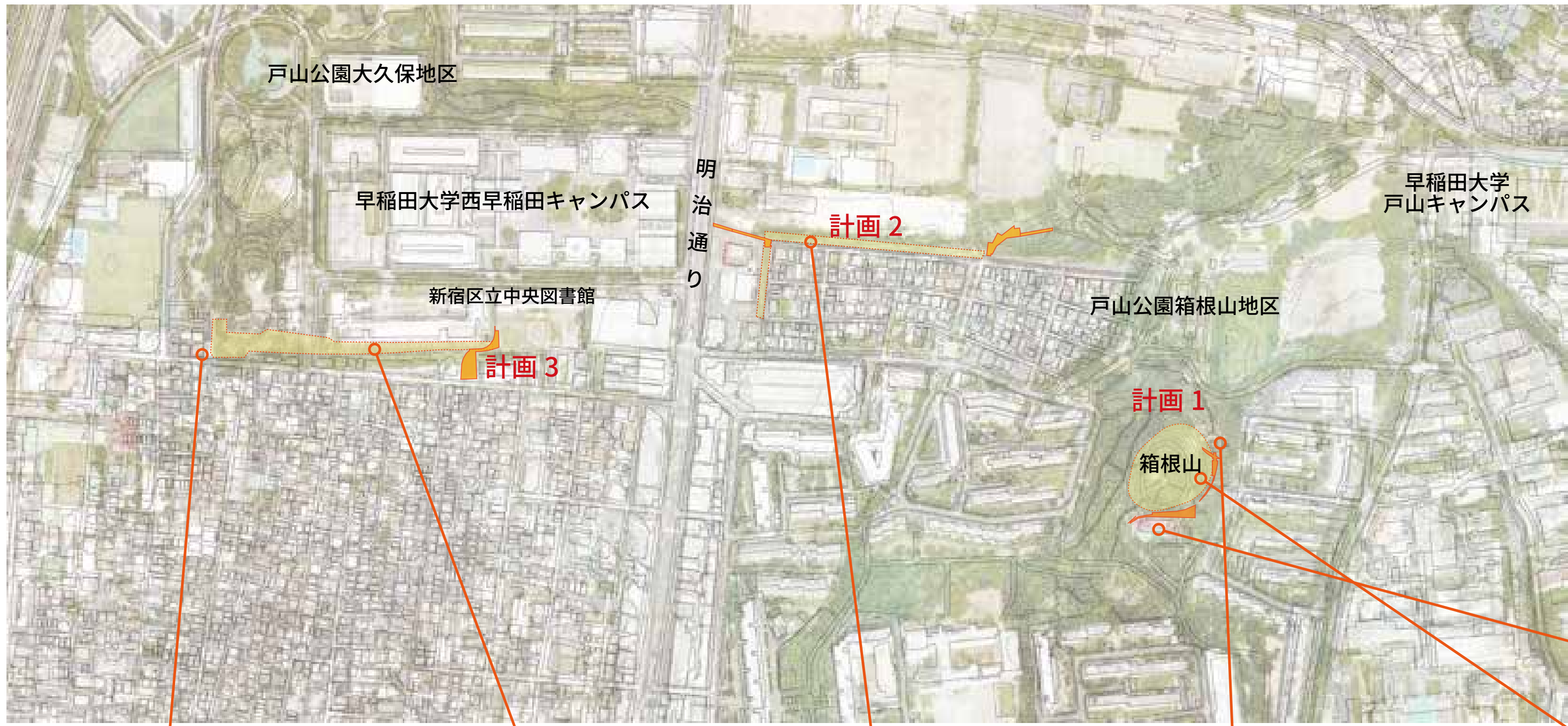
その後、ホロコースト記念館や9.11グラウンドゼロ跡地のコンペなどにおいて、記念建築を設計するにあたり様々な議論がおこる。美術史家香山檀は記念碑が逆に記憶を形骸化させると批判する（記念碑を建てることで過去を精算したことになってしまう・見る人に一方的な考えを押し付ける・体験者の経験と記念碑の形態の相違があるのではないか）。現代においては記念建築では見る側の想像力を喚起し、過去の想起に対しての感受性を育むことが重視されている。1)2)

日本において過去の戦災を学び平和を記念する建築はほとんどが戦後数十年に竣工したものであり、その形態は軸や塔、彫刻によるものや閉じた施設によるものが多い。戦後80年近く経ち、世界でも再び戦争がおこる今、過去の事実を学び現在、未来における平和を考えるための建築が必要だと考える。

03 敷地分析：都立戸山公園周辺

本計画ではかつて陸軍戸山学校の敷地であった都立戸山公園に、周辺の歴史学習を介して平和を記念する建築（展示室・資料館からなる記念館）を設計する。

陸軍学校跡地としての戸山公園：周辺の主な戦争遺構



早稲田大学西早稲田キャンパスの周辺に広がる戸山公園一帯を本計画の敷地とする。この地域の形成と変遷には長い歴史がある。箱根山地区は江戸時代には尾張徳川家の下屋敷であった。この庭園に、現在も遺る箱根山が築かれる。その後、明治初期から第二次世界大戦までは陸軍戸山学校の敷地として利用された。一帯にはトンネル状の射撃場が建設される。その周囲には流れ弾を防ぐための土塁や、擁壁が設けられた。戦後、箱根山地区には住宅不足解消のための都営住宅団地として戸山ハイツが建設される。現在は新宿スポーツセンターや遊具・広場を設けた公園となる。

これらの歴史は実際に訪れただけでは知ることはできない。しかし、土塁、擁壁、箱根山といった土木的な操作によるものはその加工の困難さゆえに開発の手を逃れ現代に遺っていることを発見した。塔や軸を0から作る手法ではなく、歴史的に生まれた土木的遺構の造形に視点を与えることで平和記念館の設計を試みる。

陸軍省所轄地境界石
「陸軍」の文字が刻まれた境界石。戸山公園周辺の土地は陸軍戸山学校用地として買い上げられ後年戸山が原と呼ばれた。住宅の駐車場の一部になっている。

射撃場土手跡
戸山が原実弾射撃場（現在の早稲田大学西早稲田キャンパス）にあった土塁の一部。流れ弾を防ぐために設けられ、現在はマンションに囲まれ隠されて遺る。

射撃場擁壁跡
早稲田大学55号館から明治通りを挟んで向いにある住宅街周囲の擁壁。ここにも陸軍の射撃場がありその周囲が直角に削られ現在に遺る。

軍楽隊野外音楽堂跡
陸軍戸山学校では軍楽教育が行われ、ここで組織された軍楽隊を戸山学校軍楽隊と称した。箱根山の入り口のすり鉢地形部に遺る。

陸軍戸山学校跡碑
明治時代、新宿区内には軍人養成を目的とした陸軍学校の諸学校があった。明治6年に陸軍戸山学校が設置され、軍事教育や研究が行われていた。

陸軍将校会議室跡（戸山幼稚園）
陸軍戸山学校の将校が会議を行った場所。現在は市立戸山教会幼稚園の園舎として利用されている。箱根山の南側に遺っている。

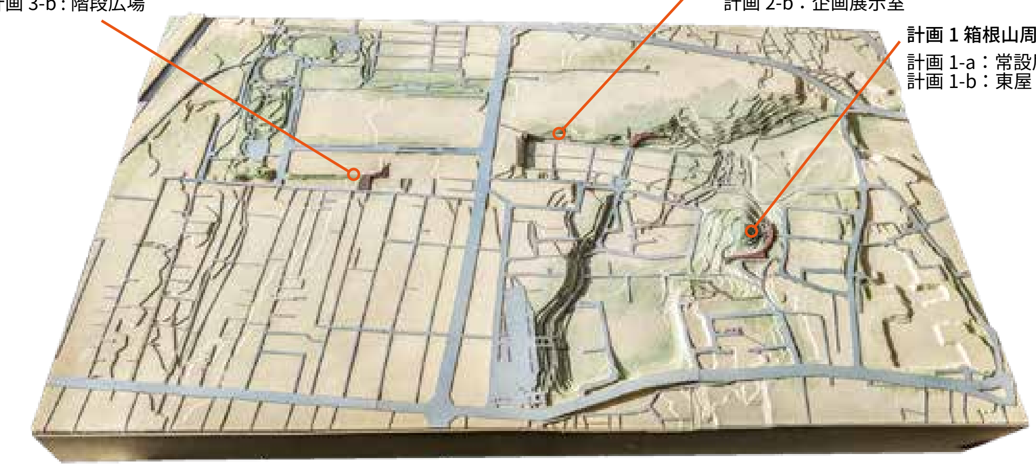
04 計画敷地

都市に埋もれる大地の編集を過去の遺物として捉えるのではなく、現代において人々が過去の出来事を想起するきっかけとして捉え直す。これら土木的遺構と公園各地に存在する史跡を巡る戸山公園一体を敷地としたひとつながりの平和記念館を提案する。

計画 3 土塁東端
計画 3-a：資料室・ライブラリー
計画 3-b：階段広場

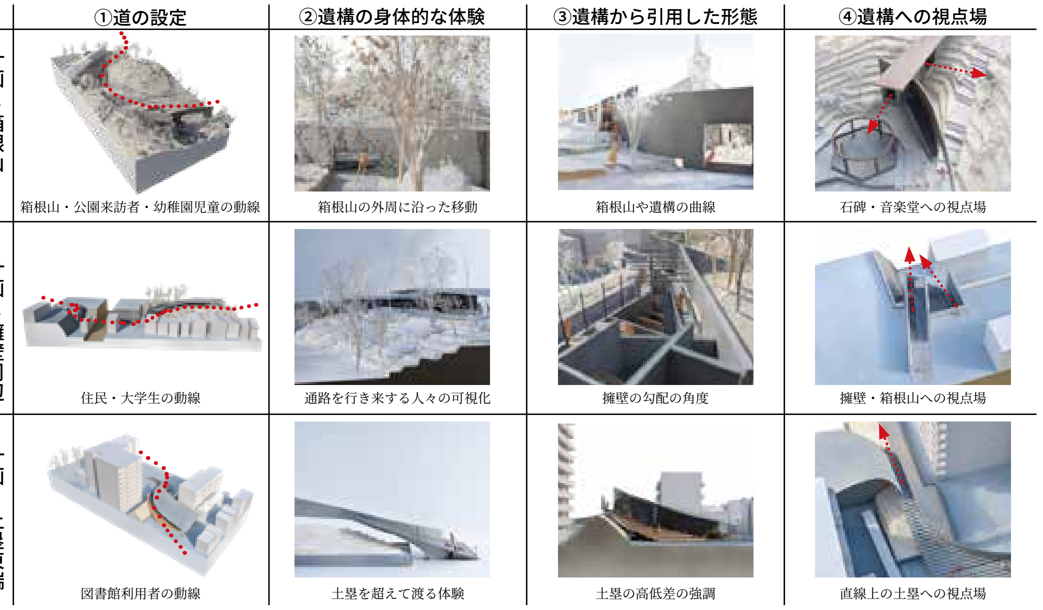
計画 2 擁壁周辺
計画 2-a：階段・EV
計画 2-b：企画展示室

計画 1 箱根山周辺
計画 1-a：常設展示室
計画 1-b：東屋


戸山公園周辺に刻まれた大地の編集と計画部

05 計画と設計手法

大地の編集歴があり、かつ人々の日常生活の動線を新たに設定できるポテンシャルを持つ場所を計画敷地とした。記念館の来訪者だけでなく周辺施設の利用者や住民、学生などが通り抜けられる道を設ける。これによりそれぞれの場所で無意識に過去の遺構に触れ、過去を思うきっかけを与えることを意図している。設計手法として①道の設定（記念館利用者とそれ以外両方）②遺構を身体的に体験する順路や高低差の設計③遺構から引用した形態の利用④遺構への視点場を組み合わせ設計を行う。



	①道の設定	②遺構の身体的な体験	③遺構から引用した形態	④遺構への視点場
計画1箱根山	箱根山・公園来訪者・幼稚園児童の動線	箱根山の外周に沿った移動	箱根山や遺構の曲線	石碑・音楽堂への視点場
計画2擁壁周辺	住民・大学生の動線	通路を行き来する人々の可視化	擁壁の勾配の角度	擁壁・箱根山への視点場
計画3土塁東端	図書館利用者の動線	土塁を超えて渡る体験	土塁の高低差の強調	直線上の土塁への視点場

計画１：戸山公園箱根山

箱根山では既存道に沿って、３つの遺構（陸軍学校音楽堂跡、陸軍学校石碑、元陸軍将校集会所の戸山教会幼稚園）を巡る常設展示の資料館と東家を設計する。既存の動線と絡まるように動線をつくりつつ箱根山の等高線を引用した円弧によって三つの遺構を結ぶシークエンスをつくる。箱根山の登山者、幼稚園や公園利用者のための休憩室としても利用できる縁側のような建築となる。

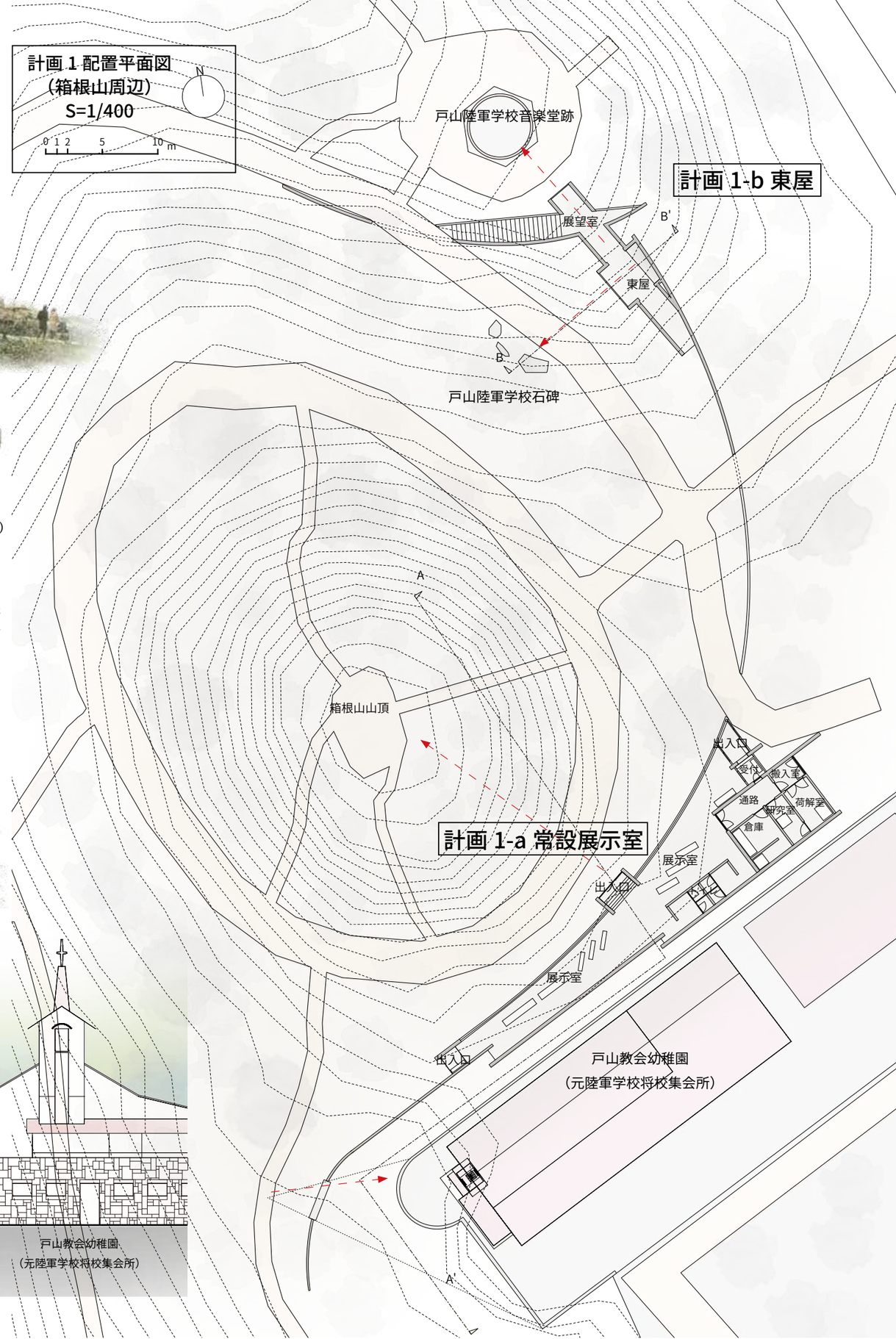
△計画 1-b 東屋

既存の遺構（陸軍学校石碑、陸軍学校音楽堂跡）への視点場となる東家である。既存動線から寄り道することで過去の遺構に意識が及ぶ。

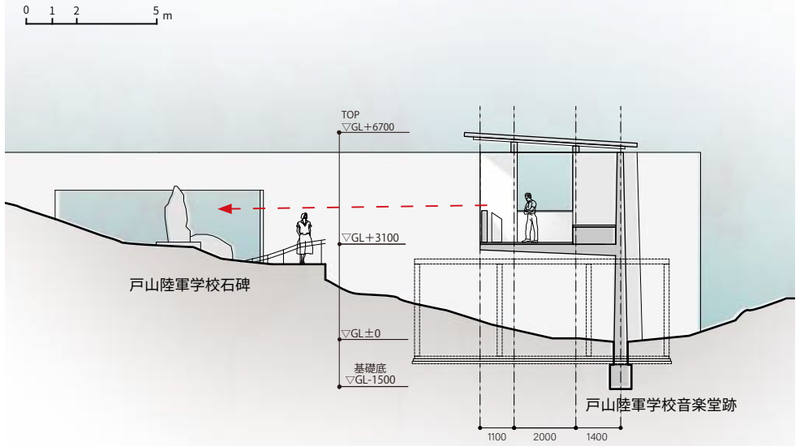
◁計画 1-a 常設展示室

箱根山の周囲に沿って展示室が広がる。箱根山や戸山公園の来訪者、戸山教会幼稚園の児童らが身近に触れる建築となる。

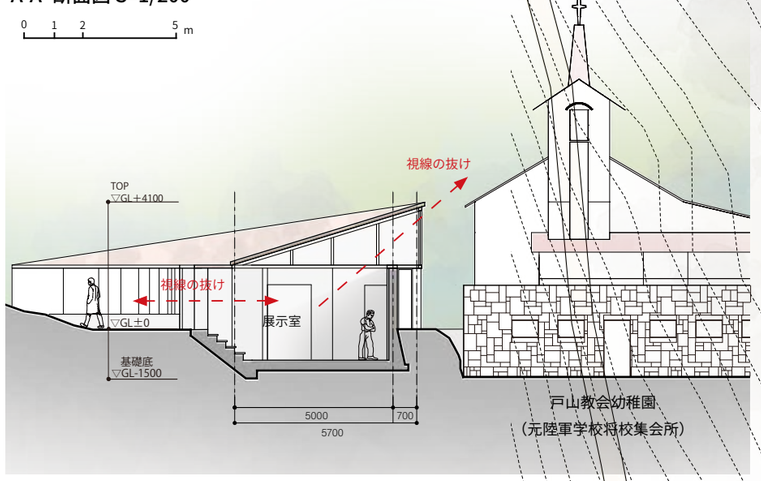
計画 1 配置平面図
（箱根山周辺）
S=1/400



計画 1-b 東屋
B-B' 断面図 S=1/200

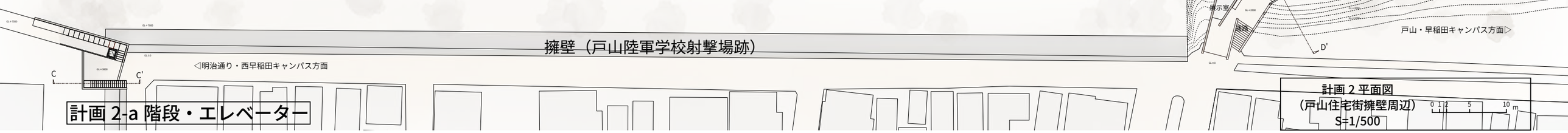


計画 1-a 常設展示室
A-A' 断面図 S=1/200

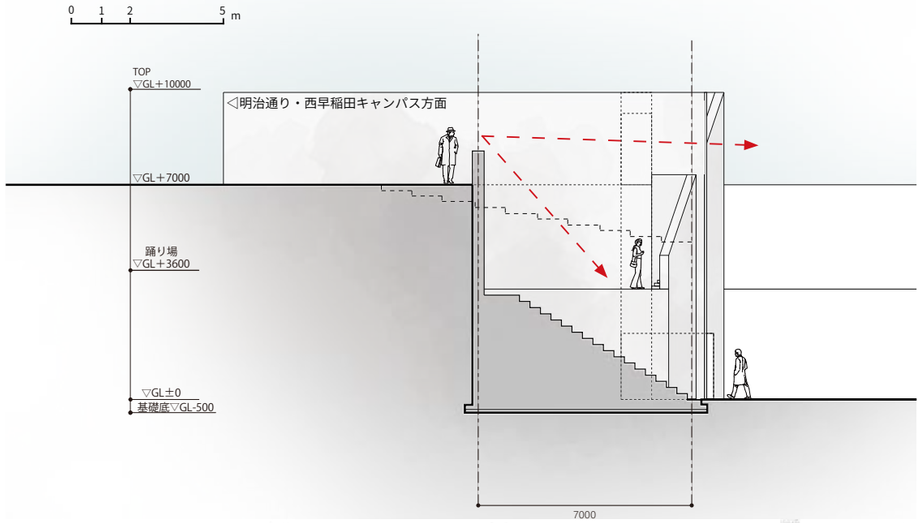


計画 2：戸山住宅街擁壁

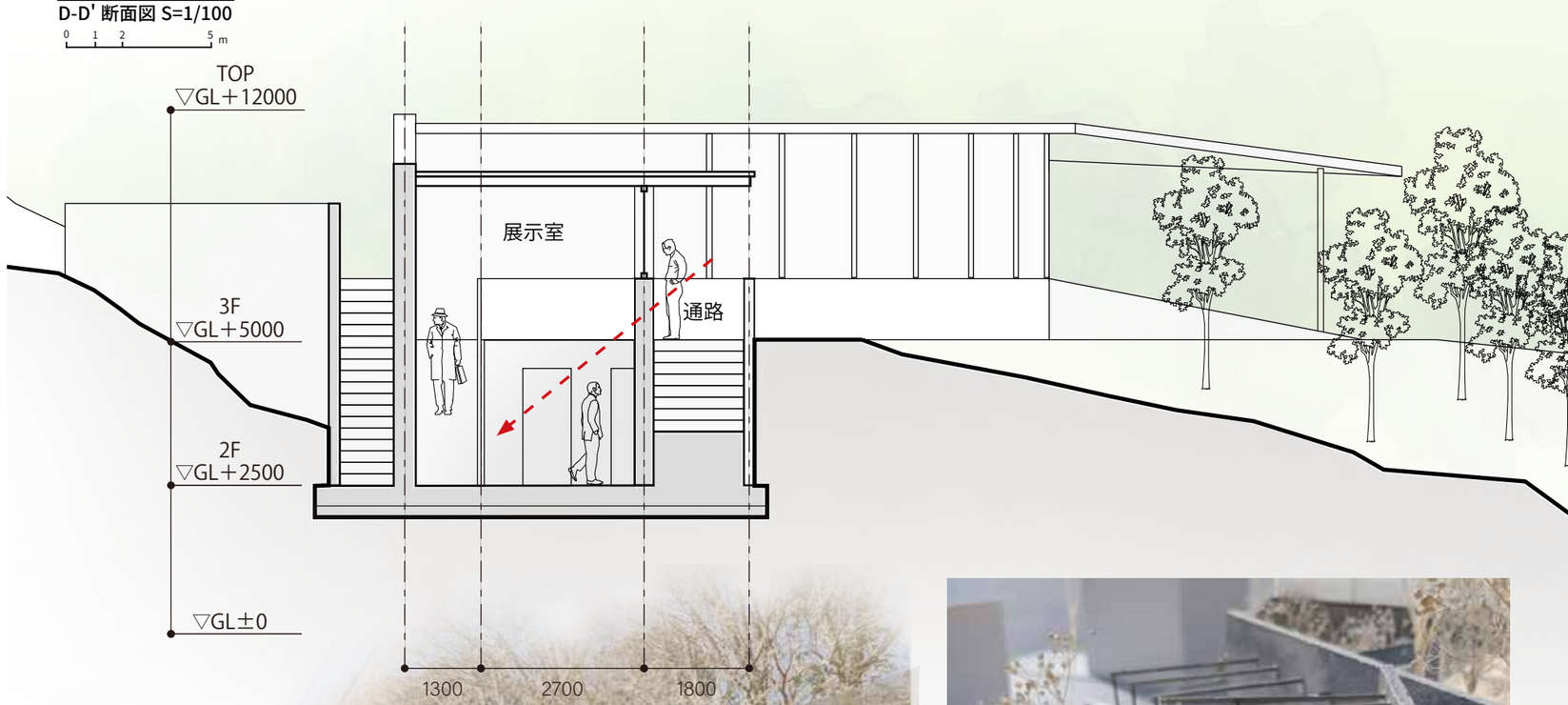
擁壁の高低差（陸軍学校時代の射撃場周囲の掘り込み）を意識させる建築を設計する。高低差を横断しながら、早稲田大学西早稲田キャンパスから戸山キャンパス、早稲田キャンパスへ結ぶ新たな道をつくり、そこに企画展示室を設計する。ここでは２箇所に設計を行う。西側の擁壁の直交する部分に、階段とエレベーターからなる建築を設計する。東側の擁壁から戸山公園へと移行する部分には企画展示室を設計する。これにより、キャンパス間を往復する学生がこの建築内を通過する。展示室を通らずに通り抜け可能な道を設けながら、通過者の興味を引くように、定期的に変わる展示内容がその動線から垣間見える。また、住宅街側から擁壁を横断する人々の動きが見えるように開口を設計する。

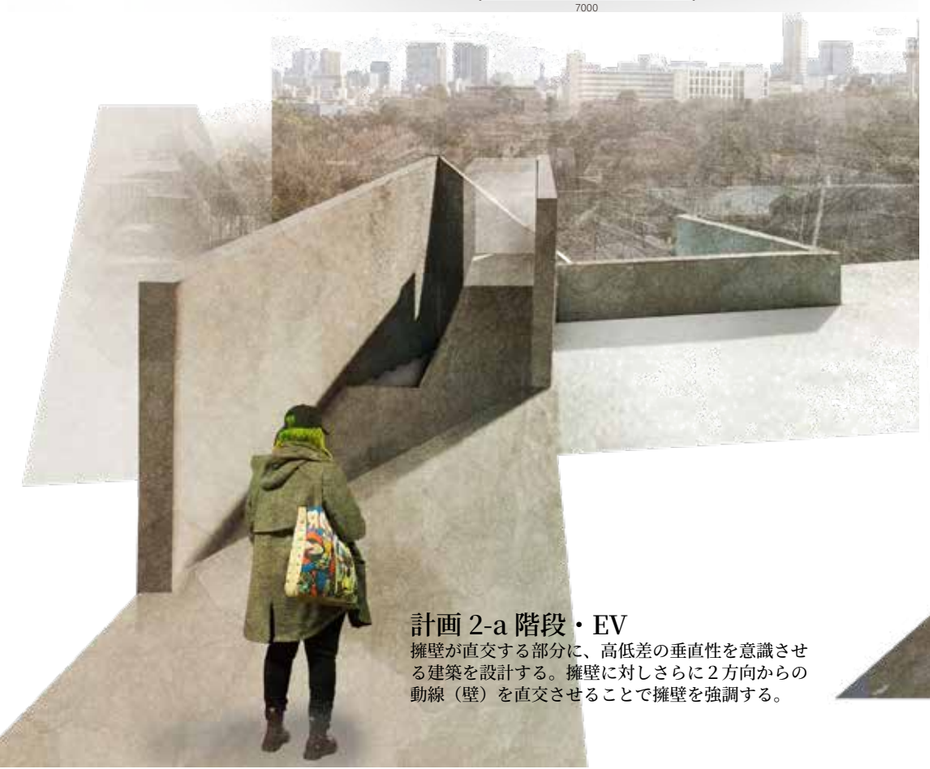


計画 2-a 階段・EV
C-C' 断面図 S=1/200



計画 2-b 常設展示室
D-D' 断面図 S=1/100





計画 2-a 階段・EV

擁壁が直交する部分に、高低差の垂直性を意識させる建築を設計する。擁壁に対しさらに２方向からの動線（壁）を直交させることで擁壁を強調する。

計画 2-b 企画展示室

戸山公園から擁壁にかけて、地形が切り替わる位置に企画展示室を設計する。大学生の動線ともなり、通路からは中の展示が垣間見える。住宅街側からは人の動きが可視化される。

計画 2-b 企画展示室

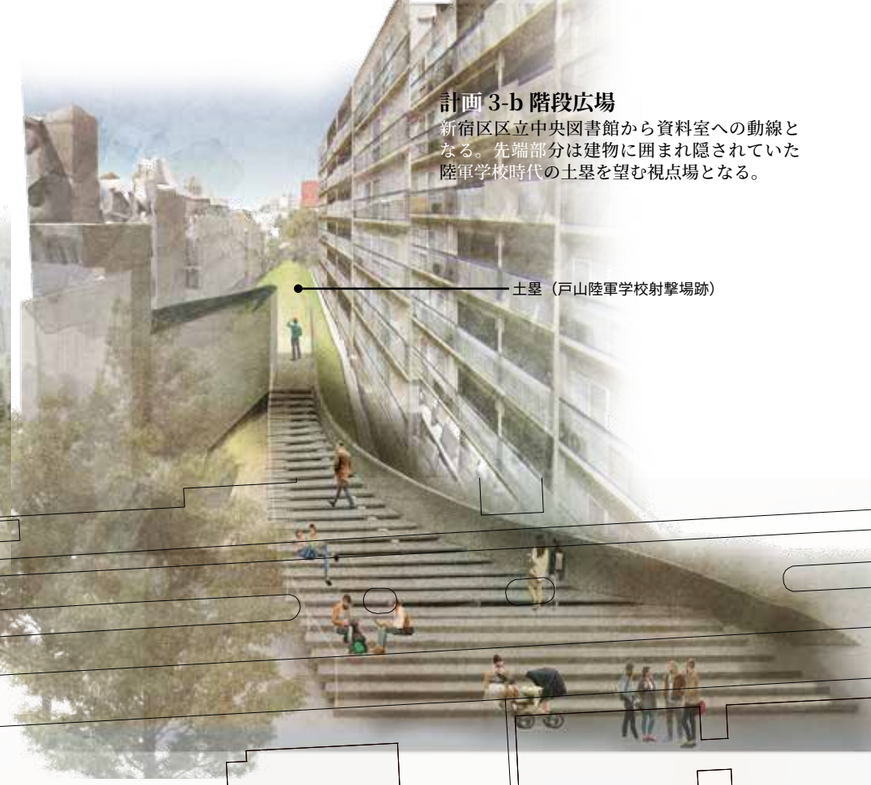
通過者動線と展示室を平行させながら、断面的に動線をずらすことで展示室のプライバシーを守りつつ通過者の興味をひく。

計画 3：大久保地区土塁東端

陸軍学校射撃場の流れ弾を防止していた土塁付近では新宿区立戸山図書館から新大久保方面への動線を新規に開設する。ここには平和資料ライブラリーを設計し、区立図書館から別館として利用できる。単純な同線としても使えるが、その道中に土塁の軸に沿って一瞬視線が開ける場を設け、通過者にその存在を印象づける。土塁の高低差を増幅させ、段々状のスラブ（階段状本棚）をつくることによって身体的にも土塁を意識させる。階段広場屋内（図書館）と階段広場屋外が土塁を軸にした線対称としてつながる。

計画 3-a 資料室・ライブラリー

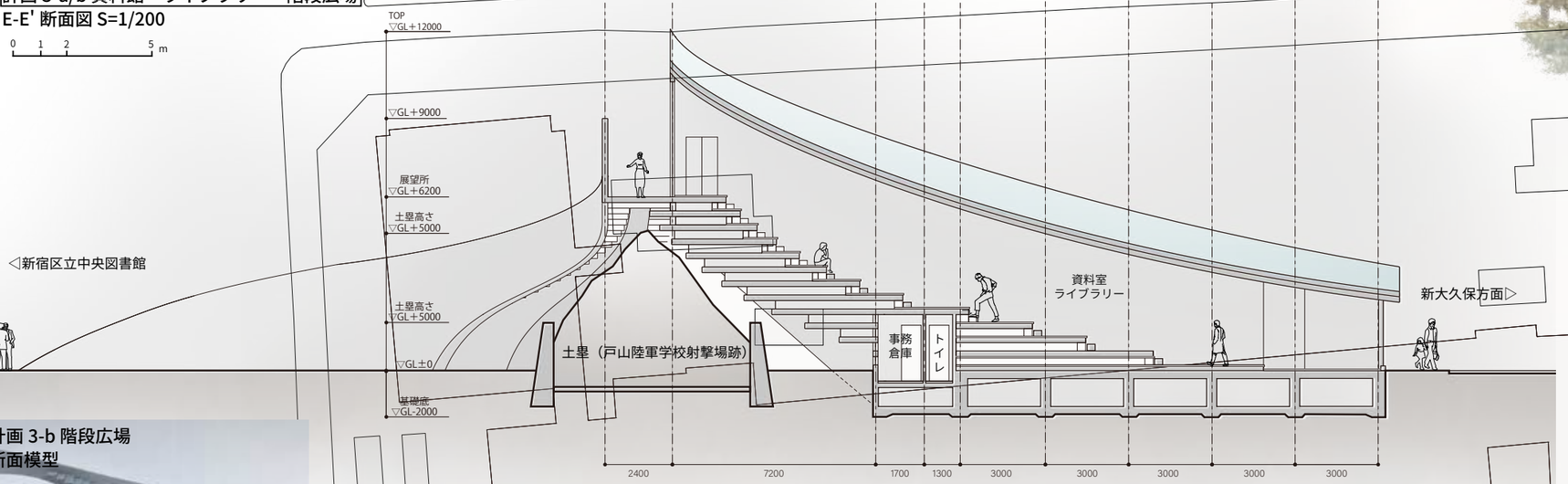
階段状の本棚を設けた記念館の資料室。道側からその高低差を強調させることで通過する人々に土塁の存在を意識させる。



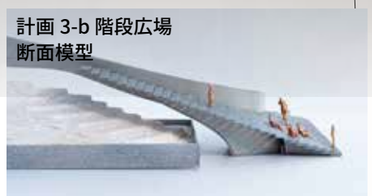
計画 3-b 階段広場

新宿区区立中央図書館から資料室への動線となる。先端部分は建物に囲まれ隠されていた陸軍学校時代の土塁を望む視点場となる。

計画 3-a/b 資料館・ライブラリー・階段広場
E-E' 断面図 S=1/200



計画 3-b 階段広場
断面模型



計画 3-a 資料館・ライブラリー
断面模型

土塁に直接触れないよう２方向から片持ちで支持した階段で２箇所をつなぐ。

計画 3 配置平面図
（大久保土塁東端）
S=1/250

0 1 2 5 10 m